

誠

SCENE・1

着物の裾がぎざぎざに破れて、脛と素足が覗いている。着物を引っ張っても脚が隠れなくて、羞恥にいたたまれない心持ちでいる葵の前で、斎藤一は袴の裾を引き裂いた。彼の袴も着物もびしょ濡れで、あちこち破れている。

「私の着物も……」

「破れているが、今はそんなことを言ってる場合じゃないだろ。怪我をしている」

「私が、ですか」

言われてしてみると、岩ででも切ったのだろうか。ふくらはぎから血が流れていた。斎藤は袴を裂いた布で葵の傷を縛り、手をひさしにして周囲を見回した。

「海だな。ここは島か」

「海ばかりですけど、ここは陸ですね。島かどうかはわかりませんが」

「俺がふと気づいたときには、海の中にいた。なにがなんだかわからないままに泳ごうとしたら、そばでおまえがもがいていた。咄嗟におまえを抱え込んで陸を目指したんだが、葵、俺たちは海にいたか」

「いいえ。私は眠っていたはずですよ。家のお布団で」

「俺もそのはずだった。なにが起きたんだ？」

さあ、と首をかしげるしかない。葵は京の母とふたり暮らしの長屋の部屋で、夢の中にいたのだ。京の都から海はずいぶん遠い。幼いころに両親に連れられて江戸から京へと旅をした際に、海を見た覚えはあるけれど、記憶も曖昧な遠い日のできごとだった。

どんな夢を見ていたのか覚えてはいないけれど、目覚めると葵は海の中にいた。海の中というよりは、正確には男の腕の中にいた。葵を片手で抱えて片手で力強く抜き手を切る男が斎藤一だと確信していたからこそ、葵は恐慌をきたさずにいられたのだ。けれども、なにがどうなってこうなったのかはさっぱりわからない。

「その怪我だけか。他はなんともないか」

「はい。別に痛むところはありません。斎藤さまは？」

「俺はなんともない」

なにが起こったのかは謎だが、斎藤がいてくれてよかった、とだけは葵は思っていた。

「ここはどこなんだろうな。食いものや水はあるのか。人はいるのか。見て回ってこよう。おまえはここにいろ」

「いやです。ひとりにしないで下さい」

「しかし、その足じゃ歩けないだろう」

「歩けます。ついていきます」

しばし思案していた斎藤は、葵に背中を向けた。

「ひとりで歩けます」

「ひとりで歩けるとしてもだ。万が一はぐれたりしたらどうする。危険があったらどうする。おまえが俺から離れそうになったら、俺はおちおち探検もしてられない。こうしたほうが楽なんだ。つべこべ言わずにおぶされ」

「でも、もしも地面に穴ぼこでもあって、そこにふたりとも落ちたりしたら……」

じろっと睨まれた。

「だって……」

「いいから」

岩にぶつかったりして、打ち身くらいはこしらえているのではなかろうか。いくら鍛えた身体だとはいっても、葵を抱えて泳いだばかりで、今度は背負って歩くとは負担が大きすぎる。しかし、あくまでひとりで歩くとはい張っては、斎藤が葵を放って探検に行ってしまうそうだったので、葵は仕方なく斎藤の背中に身を預けた。

「すみません」

無言で斎藤は歩き出した。京の季節はいつだったろう。寝巻きを着ていたはずが、今は普段着姿だ。軽装なのでこの気候には合っている。この土地では夏であるらしい。強烈な日射しと呼ぶほどでもなく、潮風は爽やかで、濡れた髪や着物を乾かしてくれる。海辺から遠ざかっていると、木漏れ日の踊る森に踏み込んだ。

小動物が駆け回る森を抜け、反対側の海辺に出る。そこに目印として砂に棒きれを一本突き刺し、斎藤は歩みを進めていった。さして距離を歩くこともなく土地をひと回りしてしまったところを見ると、やはりここは小さな島であると、斎藤は結論づけた。

「人には逢わなかった。民家もなさそうだ。無人島だな。さて、どうするか」

砂浜に腰をおろし、斎藤は立てた膝に顎を乗せた。海風が斎藤の大たぶさと、葵のうなじの後ろ毛をなぶってすぎる。

「斎藤さま、森に果実のなる樹がありましたね。果実だったら喉のかわきもおさまりますし、おなかの足しにもなります。もぎにいきませんか」

「今のところは危険もなさそうだな。腹はともかく、俺は喉がかわいてきた。行くか」

腰にさした帯刀と脇差をたしかめるようにしてから、斎藤は再び葵に背中を向けた。

「もう大丈夫です。たいした怪我ではなかったようですし、ひとりで歩けますから」

「果実は高いところになっている。俺の背でも届かない。おぶっていたらおまえには届くんじゃないのか」

「だったら、樹のそばに行ってから」

「誰も見てもいないのに恥ずかしいのか」

着物はだいぶ乾いたけれど、裾が短くなってしまったのが恥ずかしい。だが、無人島らしき島でふたりっきり、と考えると、先のことよりも今のほうを思ってしまった、なにやら胸のときめきを覚える葵だった。

「毒はないだろうな」

「食べられるかどうかわかりませんが、とにかくもいでみます」

「高いな。肩車してやろうか」

「……そんな」

「誰も見てないし、俺も覗かないから安心しろ」

着物の中を？ と思い当たって赤面しながらも、葵は斎藤の肩にすわって果実に手を伸ばした。父になれば幼いころに肩車してもらった記憶があるが、娘の年頃になってからははじめての経験だった。空が近くなり、うーんと背伸びまでしたくなる。

「重くありません？」

「おまえがか。おまえごときが重いようでは……」

そんな奴は男じゃない、と言いたげな斎藤に首をすくめてみせて、葵は名を知らぬ果実をもいだ。黄色く熟れた果実は甘い香りがするが、かつて嗅いだこともない独特の匂いだった。葵がもいだ果実を、斎藤が下で袂で受け止める。開放感とでもいうのか。葵は楽しい気分になっていた。

「先に俺が食うべきかな」

「おなかをこわさないでしょうか」

「俺は腹は丈夫だが、なにぶん未知の果物だからな」

砂浜に戻って果実を検分していると、背後で男の声がした。葵はぎくっとし、斎藤は葵の腕を取って立ち上がる。斎藤は反射的に葵を背後に押しやった。

「人がいたんだ」

なんとも面妖な格好をした、若い男だった。羽織のようで羽織ではないものをまとい、前をはだけている。その下はももひきを短くしたような腰にぴったりしたものを穿き、身につけているものはそれだけ。素足で大きな荷物らしきものを、ふたつぶら下げている。

「なにものだ」

刀に手をかけ、斎藤が誰何する。男はのんびり答えた。

「ここで時代劇の口ケでもやってんの？ 髪の毛長いなあ。それってかつら？ この暑いのに着物なんか着て、刀まで持ってんのかよ。あんた、俳優？」

「おまえの言葉は意味がわからない。なにものだ」

「末次リュウってんだけどさ、あんたは？」

「斎藤一」

「斎藤一ね。俳優にそういうのいたっけ。売れてねえ役者？」

「俺は役者などではない。武士だ」

「武士の役をやってるんだろ。あんたの言ってることのほうがわかんねえよ。それより、近くで女の子見なかった？ 美奈子って言って、あんたのうしろに隠れてる女の子ぐらいの年の可愛い子だよ。俺が泳いでいるうちにいなくなっちゃったんだ。ていうか、美奈子だけじゃなくて、浜辺に人がいなくなっちゃったんだよ。海水浴場も消えて、こんなふうになっちゃったの。なんなんだ、これは」

つつと、葵は斎藤の帯を引っ張った。

「斎藤さま、この方、もしかしたら私たちと同じように……」

「かもしれんな。すると、異国の者か」

「さあ。日本語ですし、末次さんというお名前も日本人に思えますけど」

「こんな日本人がいるのか」

「そこにいらっしゃるんですから、いるのでしょうかね」

顔立ちは日本の若者なのだが、雰囲気微妙に異なる。赤茶けた髪を短く刈ったところも、異様ないでたちも、言葉づかいもなにもかもが葵の知識にはない若者だ。年頃は葵よりやや上程度だろうか。ひょろりとしていて、背丈も斎藤と同じくらいあった。

「あんたら、恋人同士じゃないの？ 今も芝居やってんのか？ その女の子、すっげえ丁寧に喋るんだな。斎藤さま、だってよ」

「こいびととはなんだ。相思相愛の仲という意味か」

「そんなとこかな。大時代的な人たちだね。なんかすっげえ変」

「おまえのほうが見ればずっと変なんだが、その持ち物の中にはなにが入ってる？」

「砂浜にバッグだけが残ってたんだよね。こっちが美奈子の。勝手に中見たら怒られるけど、タオルとか着替えとか化粧道具とかおやつとか、そういうもんだろ。俺のもそういうもんだよ。見る？」

赤と黒の、バッグというらしき荷物の黒いほうを無造作に開き、リュウが中身を見せてくれた。葵にはよくわからないものが、ごちゃごちゃに詰め込まれていた。斎藤はおそらく、武器が入っていないかと警戒していたのだろう。ざっとあらためてから言った。

「危険な男でもなさそうだ。そこにすわって話そう。時に、おまえはこれを知ってるか」

さきほどもいだ黄色い果実を一瞥して、リュウはこともなげに答えた。

「ああ、パパイヤ。ここって無人島みたいだね。パパイヤがなってるのか」

「食えるのか」

「大丈夫だろ。美奈子もりんごかなんか持ってたぜ。ナイフもあるんじゃないかな。美奈子、ごめんな。開けるよ」

ここにはいない女にことわっておいて、リュウは赤いバッグから小刀を取り出した。斎藤の目が細まり、リュウの手から小刀を取り上げる。

「葵、食えるそうだ。むいてくれ」

「はい」

「それはおまえが持ってる」

「わかりました」

正体不明の男に武器になりそうなものを持たせておきたくないのだろう。葵に小刀を手渡す斎藤を、リュウは口をとがらせて見ていた。

「あんたらって変なカップルだな。恋人同士なんじゃないの？」

「そのようなものだが、どこが変だ？」

「だってさ、あんた、一さん？ えらそうにしてるんだもんな。女の子はえらくおしとやかだし、俺が美奈子に命令口調でもの言ったりしたら、ぶっ飛ばされちゃうよ」

「女にぶっ飛ばされるのか」

「怖いんだぜ、美奈子。今どきの女の子はみんなああだよ。きみはなんて名前？」

葵だ、と斎藤が答え、リュウは不思議そうな顔をした。

「この子はあんまり喋らないんだね。無口なんだ」

「常日頃はそうでもないが、まだおまえを警戒してるんだ」

「あんたもだろ。なんで警戒なんかするの？ 俺は人畜無害だよ」

「そのようだが」

恐る恐るパイヤとやらを口に入れてみる。独特の香りが鼻につき、不可思議な甘味が広がる。初体験の味だった。

「これでは喉のかわきには効果がなさそうだな」

「ウーロン茶だったらあるよ」

はい、ペットボトル、次から次へと意味不明の単語を口にして、リュウがバッグからビンを取り出した。

「ここは無人島だとしたら、水分は貴重だ。取っておいてくれ。おまえもこれを食べ」

「そう？ じゃ、遠慮なく」

「おまえは日本人だよな」

「そうだよ。外人に見える？」

「外人とは異人のことか」

「いじんってなに？ 外人は差別用語だっけ。外国人といわなくちゃな」

「.....？ いくつだ」

「俺？ 二十一」

「俺は二十二だ」

ええーっ?! とリュウは大げさにのけぞった。

「サバ読んでるだろ。嘘だよ」

「どうして嘘をつく必要がある。俺は数えの二十二だ」

「二十五、六かと思った。数えなんてのはうちのじいちゃんだってもう言わないぜ。あんたはいつの時代の人なんだよ」

「俺がここに来る前にいたのは、文久X年」

「ぶんきゅう？ 西暦では？」

「西暦なんぞ知らん」

もしかしたら核心に触れる質問なのだろうか。葵は息を呑んでふたりの会話に聞き入っていた。

「俺がいたのは平成XX年の日本だぜ。文久っていつだっけ？ 江戸時代だったりして」

「江戸には将軍がおられる」

「おいおい、マジかよ。あんたのその格好、芝居じゃねえの」

「俺は武士だと言っている。おまえのは満の年齢か。すると同い年だな」

「嘘だあ。いや、年なんかどうでもいいよな。なんかこう、あんたが芝居なんかしてないって思えてきて、背筋がぞくぞくしてきやがったよ」

「俺は芝居なんぞしていない。これが尋常な姿だ。おまえのなりわいは？」

「仕事？ 大学生だよ」

「俺は新選組に所属している」

「新選組い?! 俺は日本史は大嫌いだけど、新選組だったら聞いたことあるぞ。するってえと……」

タイムトラベルしちゃったわけ？ この島はいつの時代に属するのかわからないし、文久ってよく知らないけど、幕末なんだよな。いやろっぱくん、明治かな、だったな。1868年が明治維新で、幕末はそのすこし前。すると、俺とあんたたちの時代は百五十年近くへだたってるんだ。

ほぼ全部が理解不能な台詞を言い終えたリュウは、砂浜に両手をついて空を見上げた。平成とやらいう時代には、斎藤と同年の青年が学生でいるらしい。葵の時代にも年経ても学問三昧の人間はいたけれど、それにしてはリュウはのほほんとしている。

時としてかみあわないふたりの会話を総合すると、斎藤と葵、リュウとは百五十年をへだてた時の彼方から、何処にあるとも知れず、いつの時代にあるのかも知れないこの島へと、どうしたわけだかやってきてしまったのだ。そうとしか結論できないのだ。おまえの言葉がわからない、あんたこそ、と言い合ったふたりの若者は、しまいには砂浜に伸びてしまった。

「葵ちゃんはいくつ？」

「十七でございます」

「ああ、やっと直接口きいてくれた。俺は怖くないよ。しばらくつきあわないといけないかもしれないんだし、よろしくね」

「はい、こちらこそ」

さきほどから気になって仕方のない、リュウの羽織のようなものを、葵はちょっとさわってみた。

「江戸時代にこんなものはないよね。海で泳いだりもしないの？」

「漁師などは泳ぐだろう。男の子供は川で泳いだりもするが、町の者は泳がない。女が泳ぐなどあり得ない」

「ふーん、これ、パーカーっての。下は海水パンツね。あ、だったら一さん、あんたはふんどし締めてるんだ」

「当たり前だろ」

「そうかあ、当たり前なんだな。葵ちゃんは着物の下は……うわ、ごめん、もう言いません」

「馬鹿者」

間髪入れずに斎藤に蹴飛ばされたリュウは、赤くなっている葵を見ててへへと笑った。

「同い年の奴に馬鹿者なんて言われたの、はじめてだよ。うちのひいじいちゃんは明治生まれで、ついこの間まで生きてただけど、一さんと喋っているとひいじいちゃん思い出すな」

「明治とは……リュウ、その先は言うな」

「知りたくないの？」

「知りたくない」

「だったら言わないよ。一さんもよろしくね。あんたって強そうだよな。新選組なんだから当然だろうけど、俺、頼りにしてるよ」

「男を守る義理はない」

「そんなこと言わないでさ。俺は軟弱な現代青年なの。頼むよ、守ってね」

「とぼけた男だな。男が自分で自分を軟弱だと言うのか」

「ほんとだもん。新選組の斎藤一かぁ。沖田総司だったら聞いたことあるんだけど」

「リュウ、なにかことがあれば守ってやるから、そのたぐいの言葉を口にするな。聞きたくない」

「わかった」

あやふやだとはいうものの、のちの時代の人間であるリュウには、葵たちの生きていた時代の知識がある。知りたい気持ちよりも知りたくない気持ちのほうがまさるのは、葵も同様だった。

「美奈子はずもとの世界にいるのかな。俺を探してるかな」

「美奈子さまとは、リュウさまの恋人なんですか」

「リュウさま!? やめて。リュウでいいよ」

「殿方を呼び捨てになどできません」

「俺って殿方なんだ。殿さまになった気分。そんならリュウさんって呼んで。俺は葵ちゃんがいい？」

いい、と答えたのは斎藤だった。

「おまえに訊いてねえの。同い年なんだからおまえでいいよな。一は妙に貫禄あるし、なんかこう引いちゃうんだけど、いつまでつきあうかわかんねえんだし、まあ、仲良くやろうよな。そう、俺の恋人だよ。このごろやっとデートできるようになって、はじめて海にふたりきりで来たんだ。なのにこんなことになっちまってさ」

「心配なさってるでしょうね」

「美奈子お、心配してくれるかぁ」

砂浜で身体をよじってから、リュウは葵に尋ねた。

「江戸時代のデートってどんな感じ？」

「デートとは逢引でしょうか」

「ああ、ひいじいちゃんがそう言ってた。逢引ね、ムードあるな」

「.....斎藤さまはご多忙ですから、たまにお散歩をしたり、お寺なんかに行ったり」

「あんたたちと喋っていると、どうしてもひいじいちゃんを思い出すよ。ひいじいちゃんが結婚、結婚ってわかる？ 夫婦になるって意味だよ」

「はい、わかりました」

「結婚したのは明治の次の大正なんだって。そのころは結婚が決まった相手でも、デートなんかなかなかさせてもらえなかったと言ってた。見合いして結婚するって決まって、デートもせずに祝言だってさ。俺、なんにも知らない軟弱現代人だけど、親父が時代劇好きだから、見るともなくいっしょに見てたんだ。その中で言ってた台詞を思い出して喋るよ。わからなかったら言ってね」

「私のほうは、言葉の意味がわからないと言われましても、どう言い換えたらいいのかわからないんですけど」

「なんとか推理してみるから、普通に喋っていいよ」

百五十年後の男の言葉づかいは、時にやわらかく、時に意味不明だと葵は感じていた。

「そうか、あんまりデートってできないんだ」

いつか母が笑って言った。私がものわकारいのいい母親だから、あなたはまだしも斎藤さまと出かけられるんですよ。私なんかはおばあさまがきびしくて、あなたのお父さまと祝言の日取りが決まってからも、ふたりきりでなど出かけられませんでした、と。大正時代とやらになっても、そんな風習が続くのであるらしい。

「リュウさんたちはよくデートされるんですか」

「親しくなったら毎日でもできるけど、俺と美奈子はそこまではまだ親しくなかったんだ。今日こそキスするつもりだったのに」

「きす？」

「おっと、意味言ったら一に蹴飛ばされるから言わない」

「蹴飛ばされそうなことは言うな」

なんとなく眠たげな斎藤の声が聞こえた。

「おまえは実によく喋るな」

「そう？ 普通だよ。なんか俺、あんたたちの邪魔したのかもしれないな。せっかくふたりきりになれたのに」

それは葵もちらっと思ったのであるが。

「でも、ひとりにしないでくれよ。ひとりぼっちは耐えられな—い」

「心配しないでいい。ひとりにはせんよ」

「よかった。でさ、訊きたいんだけど、訊いたらまた蹴飛ばされるな。我慢しよっと」

なんだ、と問い返した斎藤に耳打ちをしかけたリュウは、またしても馬鹿者と怒られて蹴飛ばされ、いてて、と言いながら葵に笑いかけてみせた。

## SCENE・2

ごめんな、美奈子、といちいちことわって、リュウは赤いバッグを開ける。リュウの持ちものにはさして興味はないが、葵は美奈子の所持品には興味津々だった。お行儀が悪い、と考えて辛抱しているのだが、できればひとつずつじっくり見てみたかった。

「葵ちゃんも着替える？ 一くんは着替えたよ」

浜辺にいる斎藤は、リュウが持ってきていたTシャツとショートパンツという衣装に着替えている。腰に帯を巻いて大小の剣をさしているのは当たり前らしいが、武士はだらしない格好はしないものだ、が持論の斎藤は、真夏でも肌脱ぎになったりもしないので、葵は斎藤のあのような姿を見るのははじめてだ。筋肉のついた長い腕や脚がまぶしい。

「一って背、高いよな。昔のひとはちっちゃかったんだろ」

「私は小さいです」

「うん、葵ちゃんは美奈子よりだいぶ低い。一は俺と同じぐらいだから180近くあるじゃん。ひいじいちゃんはちびだったけどな」

「百八十、というのがわかりません」

「約六フィート、駄目か。何尺何寸つつうんだろうけど、わかんねえよ。葵ちゃんはちっちゃいのが可愛い。女の子はちっちゃいほうが可愛いって」

別段背の低いのを葵は気に病んでもいないのだが、リュウがなぐさめてくれているらしいので神妙にうなずいた。

「一は痩せて見えてがっしりしてるんだな。俺の服はちょっと窮屈そうだったけど、なんとか着られてよかったよ。葵ちゃんは美奈子よりちっちゃいけど、美奈子もスリムだからきっと着られるよ。ワンピースってのはなあ、下着がなあ、これはどう？ 恥ずかしい？」

たいそう気を使ってくれるのが申し訳なくて、葵はリュウが見つつけてくれた衣装を手にした。これもTシャツにショートパンツだ。

「女のひとが、男の方と同じものを着るのですか」

「女はスカートはくけどね、あとはそんなに変わらない。きみらの時代は男と女にすげえ差があるんだ。言葉も着物も髪型も、ちがいすぎてびっくりだよ。そんなじゃ不自由だろ。着てみな。動きやすいよ、それ」

見ないからね、と言って、リュウは斎藤のいる場所へと歩いていった。島にやってきたのは朝だったようで、太陽が中天から西にかたむきつつあるころ、リュウが出してくれた菓子で食事をすませた。葵には面妖な味の食べものばかりだったが、一応空腹は満たされた。

薄い水色のTシャツと、砂色のショートパンツに着替えてみる。斎藤のは上が白、下が濃紺だ。色はちがうが斎藤さまとおそろい。たしかにとても動きやすい。男たちに見られるのは勇気が必要なので、葵は脱いだ着物と、斎藤がそのへんに脱ぎ捨てていった着物とをまとめて抱えて、リュウが教えてくれた川のほうへと向かった。洗濯をするつもりだったのだ。

泉から海へと注ぐ川だ。かすかにしょっぱい水だが、飲むのも可能だろう。水は確保できたな、と斎藤が安心していた。食べものもリュウがいくらか持っているし、果実もある。小動物をと

らえることもできるだろう。当座はしのげるはずだが、長引いたらどうしよう、と斎藤は考えている。葵にもむろん不安はあるけれど、斎藤さまがいてくれる、それだけでなんにも怖くない、と思ってしまうのだった。

だらしない格好、と軽蔑していたはずの姿をしている斎藤も、のびのびしているように見える。激務から解放されて、どうしても楽しい気分になるのは止められない、といったところだろうか。

泉に我が身を映してみた葵は、髪型と衣装のちぐはぐさに笑いたくなかった。斎藤は大たぶさなので、後の世の扮装もそぐわなくはなかったが、江戸時代とリュウが呼ぶ時代の娘の髪と、この軽やかな服はまるっきり合っていない。葵は髪をこわして、斎藤と同じ形に結んだ。

これで髪も服も斎藤さまとおそろい。斎藤さまは、私がいてよかった、なんて思って下さいますか？ そんなふうに考えながら、葵は流れに着物を浸した。と、なにかの気配を感じた。

「……うっ」

獣だ。かつて一度も見たこともない巨大な獣だった。銀の毛皮に包まれ、碧玉のいろの瞳をして、一種美しいとさえ呼べる。吼えも唸りもせず、知性があるのかと錯覚してしまうような考え深げな目で、獣は葵を見つめていた。

「……斎藤さまーっ!!!」

声を限りに葵は叫んだ。運がよければ聞こえるだろう。運が悪ければ……獣の牙にかかってここで果てるのか。葵は何度も何度も声を振り絞った。

「斎藤さまっ、斎藤さまーっ、斎藤さまーっ!」

ふふっ、と獣が笑ったかと思えた。獣が笑う？ 葵は眩暈を感じながら、斎藤の名を呼び続けた。

長い長い時間が経過した、と葵には思えた時がすぎ、草をかきわけて斎藤が姿を見せた。葵、と呼びかけて獣を見つけて絶句する。斎藤のはるかあとから、息を切らせたリュウも走ってきた。

「リュウ、葵を連れて逃げろ。獣からできるだけ離れろ」

「狼か？ なんだ、あれ。葵ちゃん、こっちだよっ」

抜刀した斎藤が獣を睨み据える。リュウが葵の手を引く。人間が相手ならば三人や四人、またたく間に斬り伏せてしまう斎藤だと、葵は知っている。だが、どれほどすぐれた剣士であっても、獣を相手に戦えるのだろうか。葵はあらがった。

「離してください。斎藤さまが……」

「一は大丈夫だよ。強いんだろ。葵ちゃんをどこかへ隠して、俺も加勢する。怖いけどさ」

「大丈夫だなんて、なぜあなたに言えるんですか」

「だってさ、新選組なんだろ。いかにも強そうだし、一くん、ものすげえ顔してるぜ。見てるだけでしびれてきそうだ」

「相手は獣なんですよ、人間ではないのに」

「大丈夫だ、葵。俺は獣以下の男とでも斬り合って勝ってきてる。信用しろ。逃げろ」

獣から目をそらさず、斎藤は平静に言った。リュウが感嘆の声を出す。

「カッコいいなあ。ちっと怖いけどカッコいい。ふんどし姿もカッコよかったけど、今はもっ

とかっこいい。葵ちゃん、俺、あいつに惚れていい？」

「気持ちの悪い。黙れ」

「余裕ですな。逃げよう、葵ちゃん」

「暢気な方ですね、リュウさんは」

「そうかもね。逃げようってば」

すこしばかり気が抜けて、葵はリュウに引っ張られるままになった。そのとき、まぎれもなく獣が笑った。咆哮ではなく、人間と同じ笑い声を立てたのだ。

「なんだ、こいつ」

「笑ってるのか」

「こういう吼え声なのかな」

「葵、リュウ、き……」

かき消すように獣の姿が見えなくなった。消えた？ 三人そろってきょろきょろしていると、樹木の上のほうから男の声がふってきた。

「たいしたものだね。幕末の剣士は」

「貴様……今の獣か」

見上げると、獣と同様の銀の髪をした男が樹の股にすわっていた。黒い衣装に身を包んだ男の瞳は、獣と同じ碧青だった。

「化け物か」

「人間から見れば化け物だろうさ。その可愛い娘をよく見たくて近づいただけだ。おまえたちが不甲斐ない態度を取ったとしたら、娘をさらっていてもいいと思っていたが、この私に怪我をさせかねない腕前の持ち主と見た。斎藤一か。覚えておく」

「俺は？」

「末次リュウだったな。おまえはなかなか度胸がある。斎藤一の片隅に置いてやるよ」

「片隅かよ」

でも、褒めてもらっちゃったよ、とリュウは笑っている。斎藤は呆れた目でリュウを見た。そしてその次の瞬間、男は本当に消えうせていた。

ややあって、斎藤が葵を手招きした。相当怖い顔をしている。ひとりでうろうろするとはなにごとだ、ときつく叱られて、ひよっとしたら叩かれるかもしれない、葵は想像してかぶりを振った。

「来いと言ってるんだ。俺の言うことが聞けないのか」

「一くんは怖いねえ。行かなくていいよ、葵ちゃん」

「おまえは黙ってる」

「黙ってらんねえの。女の子にそんなに怖い顔するもんじゃないよ。心配したのはお互いさまじゃないか」

「俺は……」

「それより、葵ちゃん、よく似合うだろ。美奈子の服なんだ。ポニーテールも似合ってるし、葵ちゃんってプロポーションいいんだよな。綺麗な脚してる」

「……おまえはよくもまあ、そうまで暢気にしてられるもんだ。葵、俺の言いたいことはわかってるんだな。二度とするんじゃないぞ。俺に無断で俺のそばを離れるな。今度勝手にどこかに行ったら……いいか、わかってるんだろうな」

「はい、わかりました」

「なんだよ、えらそうに」

俺もいっぺんぐらい、女の子にそんなふうにあつそうにしてみたい、とリュウが呟いたので、斎藤も気が抜けたらしい。

「もういい。わかればいい」

「斎藤さま……ごめんなさい」

「ああ」

軽く葵の背を、リュウの手が押した。葵はふらふらと斎藤の胸に倒れ込む。斎藤はそのまま葵を抱き上げた。

「今の化け物の話はあとだ。葵」

「……はい」

「新鮮でいいな、おまえのその姿」

「……いやです」

がばっと斎藤の胸に顔を伏せてしまった葵の耳に、斎藤の笑い声が届く。あーあ、美奈子お、俺も美奈子にあんなふうにしたたり、あんなふうにされたりしたいよお、と泣き真似するリュウの声も届いてきた。

ぜーんぜんわかんね、なーんもわかんね、わかんねえことばかりだ、とリュウがやけくそで言う。俺にもわからん、と斎藤が言う。リュウの話しによると、南国の果物であるはずのパパイヤが実っていたり、化け物が棲息していたり、まるっきりわけのわからない島なのだそうだ。

「俺たちはもしかしたら、あの化け物にもてあそばれてるんじゃないのか」

「俺たちをもてあそんでどうすんだよ。葵ちゃんを嫁にでもすんのか。アニメだとよくあるな、そういうストーリー」

「おまえはまたわけのわからん台詞を」

「別に意味はないから、わからなくてもいいんだよ。夜になってきたな。夜は俺、おまえたちの邪魔にならないように森で寝ようかと思ってたんだけど、ひとりになるのはおっかねえよ。そばに置いて」

「当然だ。おまえも俺から離れるな」

「一ちゃんって頼りがいあるわあ」

「薄気味の悪い声を出すな。くつつくな」

ふざけてばかりいるリュウの存在が、暗くなりそうな雰囲気から救っているのかもしれない。「俺をさらっても嫁にはできないよ。一ちゃんはいつから見てもアブナイ奴なんだろ。ターゲットは葵ちゃんただひとりだよ。葵ちゃんを守ってやれよな」

「言われるまでもない。リュウ、一ちゃんと言うな」

「一くん？」

「なんでもいいが、俺をちゃん付けで呼ぶな」

「まったくもう、侍って奴はうるさいな。けど、侍がいるからこそ、俺たち守ってもらえるんだよな。俺と美奈子だけでここに飛ばされてきて、あんな化け物があらわれたとしたら、俺は指をくわえて美奈子がさらわれるのを見てるしかなかったんだ。あああ、情けない」

「たしかに情けない」

「うるせえんだよ。ほっとけ。いやいやいや、ほっとかないで」

裏声を出して、リュウは斎藤にすり寄った。

「おまえはやかましいんだ」

「斎藤さまあ、つめたくしないでえ」

「葵、こんな奴はほっとけ。おまえたちは寝ていいぞ。俺は起きてる」

「交代で見張りしようよ。化け物が出たら一くんを起こすから。すぐ起きるだろ」

「むろんだ」

「俺はすぐには起きないかもしれないから、殴るか蹴るかして起こしてくれていいよ。俺って熟睡タイプなんだけど、興奮しちゃってるから今は寝られないよ。先に寝てくれ」

そうしよう、と斎藤は葵の肩を抱き寄せた。リュウがバッグから出したバスタオル、手ぬぐいを大きくしたようなものを浜辺と森の境目あたりに敷き、ふたりに横たわった。

「寝ろ」

「はい、でも……」

「これでリュウは案外度胸がいいし、見た目ほど情けない奴でもない。俺は化け物の気配を感じ

たら自然に眼がさめる。おまえは寝ろ」

「私はただの足手まといなんですね」

「馬鹿。つまらないことを考えるな」

「だって……」

「言わせたいのか。おまえがいなかったら俺は……たぶん、海を泳いでどこかへ帰ろうとして、途中で溺れて死んでるさ。眠らないとばてるぞ」

「はい、でも、私にもせめて見張りくらいさせてください」

「それでおまえの気がすむのならば」

眠れぬ、ではなく、眠らぬ夜に慣れている斎藤を哀しく感じつつ、葵は目を閉じた。

目を閉じても容易には眠れない。かたわらに横たわる斎藤を強烈に意識してしまって、身体が堅くなってくる。リュウが口笛で葵の知らない曲を吹いてるのが、なにやらもの哀しく響いていた。

あの一日は夢だったのだろうか。だとしたら、夢の中で夢を見ている？

「一、寝てないのか」

「ああ」

「おまえたちって、俺の知ってるどのカップルともちがうんだよな。今どきって、俺たちの今どきだけど、そんなカップルはどこにもいないぜ。なあ、さっき訊いたこと、答えろよ」

「おまえが昼間に訊いたあれか。どこまで行ってるんだ、だったな。どこへも行っていない。心がつながってるだけだ」

「おまえだって若い男だろ。そうやって愛しい女の子を抱いて寝てて、性欲ってのは感じないのか。性欲は別のところで処理するのか。お女郎さんってんだっけ。そういう女を買うのか」

「そんな話はしたくない」

「ごまかしてる」

「うるさい」

どこまでがうつつで、どこからが夢なのか。葵にはわからない。覚醒と眠りのはざまにいて、男たちの会話が漏れ聞こえていたような気もするが、現実には聞こえていたのだろうか。

「おまえたちも俺って言うのな。拙者とか言わないの」

「改まった場合になら言わなくもないが」

窓の外では嵐が吹き荒れている。葵は斎藤に寄り添って、雨と風の音を聞き、稲光を見ていた。猛烈な音とともに雷が落ちた。思わず小さな悲鳴をあげた葵を、斎藤の腕が抱き寄せる。夢、これはあきらかに夢だ。

「俺がいる。怖くはないだろ」

抱きすくめられて畳に倒れていく。節が高く指の長い大きな手が頬を撫でる。再びの落雷。激しさを増すばかりの嵐の音。

「ここはどこですか」

「どこだろう。わからないが、俺がついてる。俺はここにいる。おまえを守るためにここにいるんだ」

「……はい」

身体のコに甘い蜜があって、とろとろととろけて全身を包む。荒れ狂う嵐とうらはらの、あるいは、荒れ狂う嵐と同質の男の熱情が葵の中の女に火をともしたかのように……

「きすというのはこれのことらしい」

「え？」

きゃっ、と声を上げて葵は飛び起きた。

「斎藤さま、今、なにか？」

「キスするのはどうやるのか、俺が教えてやったんだよ。ほっぺたにちゅってさ。ほっぺたかよ。一くんはそういうところは純情だね」

夢の続き？ いや、周囲は明るくなり、斎藤が葵から身を離して咳払いしている。夢の中でも

きすと言って……目覚めると夢のかけらが霧散していき、かすかな余韻も次第に消えていく。リュウが斎藤を見て笑った。

「俺はいつの間にか寝ちまった。葵ちゃんも寝てたみたいだった。一くんは寝たのか」

「おまえが俺を起こす前には寝た」

「ほんとかな。化け物は出なかったみたいだね。二日目の朝だ」

うーんと伸びをしたリュウはバッグを探してなにかを取り出した。

「これ聴くと思切り目が覚めるよ。ラジオもケータイも駄目だけど、これは電池で動くから大丈夫。一、耳にあててみるよ」

「なんだ、これは」

黒く小さな箱の横から、細い細い紐が出ている。紐の先端には小さく丸いものがついている。これでいったいなにを聴くのだろうか。眉をしかめつつ斎藤が丸いものを耳にあて、しかめっ面になった。

「耳がどうにかなりそうだ」

すぐに丸いものを放り出した斎藤に向かって、リュウはにやにやしてみせた。

「俺たちの時代の音楽だよ。ディスクマンっていうの。この中にこういうちっちゃなディスクが入ってて、デジタルで音を出すわけ。わかる？」

「わからん」

「俺にも原理はわかってないんだ。文明の利器って言ってね、俺たちの時代には便利なものがたくさんあるんだけど、なにがどうやって動くのかはわかってなかったりする。俺、経済学部なんだ。落ちこぼれがなんとか入れた大学。得意な分野がなくってさ」

たびたびリュウが口にする、理解不能な言葉を斎藤がさえぎった。

「それが音楽か。そんなものを聴いてどうするんだ。騒々しいだけじゃないか」

「じいちゃんみたいなこと言うんだ。考えてみたら、きみらってひいじいちゃんより年上なんだよな。音楽を聴くのは娯楽だね。けど、目は覚めただろ」

「ああ、しっかりとな」

おまえはやめておいたほうがいい、と斎藤が言うので、葵はうなずいた。汗と海水が残る身体が気持ち悪くて、願望をつい口に出してしまう。

「……お風呂に入りたい」

「そうだな。昨日は海を渡ってきたんだから、身体がべたべたしてる。温泉でもあるといいんだが、そう都合のいいものがあるわけもない」

「せめてあの泉で身体を洗う？俺たちが見張ってやるから、葵ちゃん、入れば？」

「行ってみるか」

泉に身体を浸したりしたら、水が汚れて飲めなくなるのではないか、そう考えながらも三人で泉のほうに行ってみた。ここに入るのか。ためらっていた葵は、リュウの大声に振り向いた。

「葵ちゃん、こんなもの、昨日はなかったぞ」

「こんなものとは？」

「湯気が出てるよ。一がさっき言ってた温泉だ。都合よすぎない？」

ちいさな泉と同じくらいの大きさの、人が三人程度なら入れるような温泉が突然湧いたとでも

いうのだろうか。泉からいくぶん離れた場所で湯気を立てている湯に、斎藤が手を入れた。

「ちょうどいい湯加減だ。なんなんだ、この島は」

「葵ちゃんのために温泉が出現したんだよ。入れば？」

「でも……」

「絶対に見ないからさ。バスタオル巻いて入ったらいい。テレビの温泉番組では女のひとはみんなそうやってるよ」

「ちょっと待て。俺が先に入る」

「なんでだよ。風呂は男が先だってか」

「そうではない。湯になにか変なものが溶け込んでたらどうするんだ」

「用心深いんだね。しかし、あり得るか」

無造作に衣服を脱ぎ捨てた斎藤を見て、カッコいいヌードだなあ、とリュウが惚れ惚れしたような声を上げた。

「ふんどしって意外とカッコいいんだ」

「リュウさんの時代にはないんですか」

「ないない。たまに遠泳したりするガキや男が赤ふん締めてるのは見たことあるけど、俺らはブリーフかトランクスだよ。見る？」

「いいえ、けっこうです」

「遠慮しなくていいのに」

そろそろと斎藤が湯に身体を沈めようとしたとき、温泉が唐突に消えた。

「は？」

「うげ、間抜け」

「間抜けとはなんだ」

「だって、風呂に入るカッコして、さて入ろうとなつて、そしたら温泉がなくなったんだぜ。間抜け以外のなんなんだよ」

「なぜ消えるんだ。だしぬけに湧いて出たりだしぬけに消えたり、はは一ん、貴様の仕業か」

昨日はその出現の気配を感じたのだが、今日はまったくなにも感じなかった。だが、昨日の獣が姿をあらわし、人間の声で喋った。

「今は気配を消していたんだが、おまえはさすがだな」

「貴様は実にさまざまな芸当ができるようだ。獣になったり人の姿になったり、温泉を湧かしたりもできるのか」

「この湯は葵のために出してやったんだ。男が入ると穢れる」

「葵には親切なんだな」

「当然だろう。私も一応は男だ」

ごくりと唾を呑んだリュウが、葵を背中に押しやってから言った。

「もっと深いたくらみがあったんじゃないかねえの。一が先に入ると言い出すだろ。そしたら裸になる。そしたら刀を遠ざける。刀を持ってる新選組はおっかねえから、丸腰どころか素っ裸にしちまえてさ」

「ほお、それもあったな。そこまでは考えてなかったが、斎藤一、その姿で私と戦えるか」

「貴様がそのつもりならば」

さきほどまで温泉のあったあたりに、斎藤の服と剣がまとめて置いてある。葵は夢中で駆け寄り、大刀を拾い上げて斎藤に投げた。斎藤はあやまたず剣を受け止めた。

「そうしてくれると思っていた」

「斎藤さま……」

「葵ちゃんもさすがだね。俺は思いつきもしなかったよ。逃げよう。逃げて見物しよう」

「剣を持つおまえは相手にしたくない。私は事実魔の世界の生き物だが、斬られれば怪我はするんだよ。まったくよけいなことを」

銀の獣が葵に向けた目は、なぜか笑っているように見えた。そのまま獣はかき消え、その碧青のまなざしだけが宙に漂っているかのような錯覚を残していった。

「くそ、また消えやがった。消えたりあらわれたりする奴は始末が悪い」

悪態つきつき、斎藤は衣服をまとった。

「おまえを先に入れてやればよかったな。温泉もなくなっちゃった」

「そんなことはいいんです」

「そうだよ、一ちゃん。裸の葵ちゃんをさらってくことだってできるはずだぜ、あいつ」

「そこまで考えるのなら、葵をいきなり裸にしてさらっていくこともできるはずだ」

私はそんな不躰な真似はしないよ、と声が聞こえてきた。斎藤は刀に手をかけ、リュウは葵の手を握りしめ、葵はリュウの手を握り返し、そうして四方八方見渡してみたが、姿はどこにもない。

「葵ちゃんって手もちっちゃいね。けど、なんだか荒れてる。苦労してるんだ」

「リュウ、むやみに葵に触れるな」

「だって、これが俺の使命だもん。奴が一ちゃんに牙を剥いたら、俺は葵ちゃんを連れて逃げる。そうだろ？」

「それはそうだが、奴はいないんだから手を離せ」

「わかったよ」

こちょこちょと葵の手をくすぐってから、リュウの手が離れた。斎藤はリュウをじろりと見る。

「俺が言ったことを忘れたのか」

「なんだっけ」

「ちゃん付けで俺を呼ぶな」

「そういうこと言ってる場合じゃないでしょうに、きみも暢気だね。なあ、これからどうする？」

一ちゃん、じゃなくて、斎藤さま」

腕組みをして思案の末、斎藤は言った。

「島をくまなく探検する。おまえは葵を連れてついてこい」

「はいはい、どこまでもお供つかまつり申し候でござる」

「おかしい言い方をするな」

なにがどうなっても冗談をやめないリュウは、どことなく沖田総司を彷彿とさせる若者だった

。沖田のほうが数倍凛々しくて、数倍強くて、数倍たくましいはずなのだが、ときおり下らないざれごとを言っは、その口を閉じろ、と誰彼となく叱られている、そんな沖田を葵は思い起こしていた。

「手、握っていい？」

「かまわんぞ、俺が許す」

「一に許してもらおうのか。ま、いいや。葵ちゃん、きみの時代の男ってみんなこんな？」

「みんなではありません。いろんな方がいらっしやいます。新選組にもそれはもう、いろいろな方がいらっしやいます」

「マニアだったら垂涎のまとして台詞なんだろうけど、俺は新選組もよく知らないんだよな。ドラマで見たことはあるけど、興味なかったからちゃんと見てもいなかった。きみがどのあたりの幕末にいるのかも知らないんだから、あまり詳しく話しちゃいけないんだよな。ていうか、詳しくなんか知らないしさ」

「リュウさんの時代を想像すると、私は頭がくらくらしてきます」

男と女が大差ない髪型をして、大差ない服装をして、ひと目見ただけではなんのためにあるのかわからないものがあふれている。新選組が芝居になる時代。はるかに遠い時の彼方。肌もあらわな水着というものを着て、男と海で泳ぐ娘たち。男と対等の口をきける娘たち。美奈子も大学生だとリュウが話してくれた。女が高等な学問をする時代なのだ。

断片的なそれらの風景が、曖昧ながらも葵の脳裏を行きすぎる。この目で見てみたいような、見るのが恐ろしいような景色に思えた。

「しかし、あんな化け物はいないよ。いるとしたらホラー映画かアニメの中だけだ」

「意味がわかりません」

「化け物はいないの。でも、ここにはいるんだよな」

狭い島だ。ほんの一刻もあれば全島を徒歩でめぐるのが可能な、ちっぽけなのに異常な島だ。昨日はすべてを見たのではないが、こんなものはなかった、あれもなかった、とリュウが指さし、斎藤が眉間に縦じわを刻んだ表情でうなづく。

「あれ、さくらんぼだ。桜の樹なんだな。俺はよく知らないけど、さくらんぼとパパイヤが同じ気候で育つもんかね。あちゃあ、椰子の実まである。こんなに果物がいっぱいあったか。バナナだぜ、あれ。かと思ったらぶどうにりんごにみかん。気が狂うよ、俺」

「ふむ。昨日よりも果実が目につくな」

「化け物が葵ちゃんにプレゼントしてくれたんだ。女の子は果物が好きだろ。どうせだったらみたらし団子とあんころ餅でも出してみろ」

そのたぐいは出現しなかったが、斎藤が手を伸ばしてぶどうをひと房もぎ、葵に手渡した。

「あの化け物はこの島に棲んでいるのではないのかもしれない。そのような痕跡がない。これ以上歩いていても無駄だな。適当に果実を取って戻ろう。リュウ、簡易な小屋でいいから、ねぐらを作る必要があるそうぞ」

「そうだね。スコールが来るかもしれないもんな」

「すこーるとは？」

「嵐、台風、大雨、ハリケーン」

嵐、のひとことが葵の心を刺激した。嵐の中で斎藤さまと私は……熱い熱い……なんだっただろう。思い出せない。

「いつまでここにいるのかな。化け物さえいなかったら、俺はけっこう楽しいんだけど。一とふたりきりだったらつまんねえけど、葵ちゃんがいてくれるんだもんな」

「俺もおまえとふたりきりだったら、おまえの口に斬りつけている恐れがあるぞ」

「あぶねえ。でも、美奈子に会いたいしなあ」

ほっとため息をついてから、リュウは言った。

「無事に俺の世界に戻れたら、俺、新選組マニアになるよ」

「また暢気に……ほざいてろ」

「決めた。俺は新選組マニアになる。おたくに負けないマニアになって、蘊蓄クイズで優勝するんだ」

またまたまた、さっぱり意味不明の言葉を口にするリュウを見て、斎藤はため息をついた。

二日目の夜が訪れた。斎藤が獲ってきてくれた魚と海草を料理している葵を、リュウが見守っている。斎藤は木の枝を組み合わせてなにか作っていた。

「サバイバルは昔のひとのほうが得意なんだよな」

「さばいばるってなんですか」

「純日本語はむずかしいや。俺の言っていることは聞き流して」

「はい、そうします」

「純愛なんだよな、きみたちは」

「その言葉はなんとなくわかります」

「きみは一にぞっこんで、えらそうにはしてるけど、一もきみを愛してて」

「斎藤さまもそうですか」

「あれれ、きみにはわからないの？」

真水で海草を洗い、リュウが持っていた小刀で刻む。肴は串にさして火にかざす。よい香りがしてきた。

「おしょうゆがあればいいんですけど」

「俺にもうまく言えないけど、男同士だからわかるよ。あいつは俺から見たらとんでもなく異質な男だけど、きみをどれだけ愛してるかはわかる。昨日、きみが着替えてたときに一のところへ戻ったら、あいつは刀の手入れをした。葵は？ と訊いた。着替えてる、と俺が言ったからしばらくは黙ってたんだけど、そのうち血相が変わってきて、遅すぎる、と怒った顔して走り出した。俺もついてったんだけど、あいつの走るの速いのなんのって、スピードもパワーも俺とは大違い。スピードは速度。パワーは力ね。わかる？」

「はい」

では、葵の声が届いたのではなく、その前に葵を探してふたりは走っていたのだ。

「息も切らさないんだよな、あいつ」

彼の言葉には異国語がふんだんにまじるのだとは葵も理解できるようになっていたが、日本人がなぜそうやたらに異国語を使うのかはわからない。リュウも首をかしげて、日本語だけじゃ表現できないことが多すぎるからかな、と言っていた。

「きみを守るのが今のあいつの生きがいなんだよ。守られてやってくれよな」

「守られてやって、だなんて。斎藤さまに守っていただけなかったら、私はどうしようもありませんのに」

「しおらしいんだよなあ。女の子も変わるもんだね。美奈子なんかすげえんだよ。まあ、暴力使って喧嘩したらとりあえず俺のほうが強いだろうけど、他は全然かなわない。大学も美奈子のほうが格が上だし、口は達者だし」

「リュウさん以上なんですか」

「もちろん。今どきの女の子って見栄っ張りなのもよくいて、俺みたいな二流大学は相手にしてくれなかったりするんだけど、美奈子はそんなことない。怒ると怖いけど、普段はやさしい。きみを見てると、美奈子は女らしいなんてとても言えないけど、価値観がちがうんだよな、昔と

今は。きみはそれでいいんだと思うよ。美奈子はあれでいい。可愛いところもあるしさ」

「なんとなく、わかる気もします」

「俺、口下手だからね。うまく言えない」

「リュウさんが口下手でしたら、世の中の人はいが口がきけないようなものなんじゃないんですか」

「きみもなかなか言うんだ。お、うまそう。料理も上手だね」

「料理というほどのものではありません」

「美奈子にはこれは無理だよ。ガスとか電子レンジがないと料理できないんじゃないかな」

「火はリュウさんがおこして下さったんですよ」

「おこしたんじゃないよ。ライターがあったもん。俺さあ、禁煙してたんだけど、古いタバコとライターがバッグの底に残ってたの。一は喫うかな」

「どうかしら」

土方歳三が煙管をくゆらせていたのは見覚えがあるが、斎藤がそうしているのは記憶になかった。

「焼けたようです」

「一を呼んでくるよ」

立ち上がったリュウが葵からかなり離れた刹那だった。三たび出現した獣が頭で葵を掬い上げ、その巨大な背中に乗せてしまったのだ。

「うわっ、一っ、一っ！ おーい、大変だよっ！」

猛スピードで駆けつけてきた斎藤が、げんこつでリュウの頭を殴った。

「葵から離れるなと言っただろ」

「ごめん、だってさあ」

「言いわけは無用だ。貴様、葵をどうするつもりだ」

「こうするんだよ」

獣の背中で葵は正座していた。獣は背中をゆすり、葵の身体をはじき飛ばした、と感じた次の瞬間、葵は空に浮かんでいた。

## エピローグ

空に浮かんでいた葵が消えた。おのれだけではなく他者までも消してしまえるのか。斎藤一と末次リュウは呆然と顔を見合わせた。

「楽しかったよ」

獣が笑う。

「なんのためにこんな真似をしたのか、と訊きたいんだろ。無作為に選んだ私の暇つぶしだったんだが、楽しい組み合わせだった。記憶は消しておく。帰るといい」

「どうやって？」

「私が帰してやるさ。私は長い長い長い刻を生き、生きすぎて退屈している。時としてこんな遊びをしたくなるんだ」

「葵は……」

「先に帰った。あの娘の記憶にはほんのすこし……」

輝く銀の毛並み、碧とも青ともつかぬ深い湖の静寂をたたえた瞳、微笑みすらたたえて獣がうなづく。魔獣の悪戯に翻弄されたふたりの青年の意識が、そこでフェイドアウトしていった。

なにぼーっとしてんの、と肩を叩かれて、リュウは我に返った。

「あれ、寝てたかな」

「目をあけて寝てたの？ 変な奴」

オレンジのビキニに包まれたのびやかな美奈子の肢体が、リュウの視界いっぱい広がる。

「夢を見てた」

「目をあけたまま？」

「そうみたいだ。キーワードは新選組なんだよな。幕末の男と女」

「なによ、それ」

「よくわからないけど、新選組の斎藤一。知ってる？」

「斎藤一ねえ。聞いたことあるみたい。だけど、新選組ったら沖田総司でしょ。それから近藤勇と土方歳三。あとはうろ覚え」

「うーん、なんなんだろ。なんだかすごく幕末の勉強がしたくなってきた」

「変なの。リュウは日本史は大の苦手だって言ってたくせに」

「そのくせ理系も苦手。文系もイマイチ。体育会系でもない俺ってなに？」

「漫才系じゃないの」

「……言えてる。それはそうと、美奈子」

「なに？」

「今夜は……帰らなきゃいけない？」

「あたしたちって始めてふたりきりで遠出したんだよ。まだ早いんじゃない？」

「そうか、がっかり」

賑やかな海水浴場で、大勢の人々がさざめいている。ビーチボールで遊ぶ子供たち。砂をかけ

合い、けたたましく笑っている少年たちと少女たち。むこうでは若いカップルがふたりだけの世界に浸り、子供連れの夫婦がサンオイルを塗りっこしている。おなかの出たおじさんと太目のおばさんのカップルもいた。

「誰も見てない、よね」

「あ」

素早い美奈子のキスが、リュウのくちびるをかすめていった。

「今はこれだけ」

「次はこれ以上？ 期待していいのかな」

「うん、そのうちにね」

「美奈子、好きだよ」

「あたしも、リュウ、好き」

肩の上に美奈子の頭が乗っかる。海水浴場の喧騒に、静かに広がるひとつこひとりいない浜辺が一瞬重なって見えた。そこにあらわれた男と女。あれは誰だ？ けれどもまぼろしは、触れ合う美奈子の素肌の感触に負けて、じきに消えた。

夢の中で夢を見て、夢の中でべそをかいたり怯えたり、なにやらさまざまなできごとがあったように思えるが、所詮夢は夢だ。葵は寢床から起き上がり、身支度を整えて家から外に出た。井戸端で顔を洗って、手ぬぐいでぬぐってから振り向くと、そこに斎藤一の姿があった。

「斎藤さま、おはようございます」

「ああ」

まぶしげに目を細めて、斎藤が葵を凝視している。

「どうかなさいましたか」

「いや、変だ。どこがどう変なのかわからんが、変なんだ。とてつもなくおかしな夢を見ていた気がするんだが、思い出せない」

「私も夢を見ていました」

嵐の夜にふたりきり、だったか、無人島にふたりきり、だったか、他にも誰かいたようにも思える。

「俺がいる。怖くはないだろ」

「純愛なんだよな、きみたちは」

「どこへも行ってない。心がつながってるだけだ」

「きみは一にぞっこんで、えらそうにはしてるけど、一もきみを愛してて」

「俺がついてる。俺はここにいる。おまえを守るためにここにいるんだ」

「俺にもうまく言えないけど、男同士だからわかるよ。あいつは俺から見たらとんでもなく異質な男だけど、きみをどれだけ愛してるかはわかる」

「きみを守るのが今のあいつの生きがいなんだよ。守られてやってくれ」

別々の男の声がごっちゃになって、葵の記憶の遠いところでぐるぐる回っていた。

「きすというのはこれのことらしい」

頬に触れたくちびる……葵は呟いた。

「きす……」

「きす？ なんだ、それは」

「さあ……なんでしょう。わかりません」

つかまえようとする手の間をすり抜けて、かすかな記憶が逃げていく。

「私の夢は楽しかったんです。それだけは覚えています」

「俺も楽しんでいたような気がする。しかし、朝っばらから夢がどうのこうの言っててもはじまらん。今日は非番なんだ。朝餉がすんだころに迎えにくる。どこへ行きたいか考えておけ」

「はいっ!」

そう、夢は夢、幻だ。斎藤さまとデートできる、その喜びで胸がはずむ。ん？ デートってなに？ ふと浮かんだ疑問もつかの間、葵はいそいそと朝食の準備にとりかかった。

END

## ミラージュアイランド

<http://p.booklog.jp/book/33086>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33086>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33086>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.